

# ドイツ文学わき道散歩 (18)

京都の街を歩いていると、時折はっとすることがある。千年の都・京都は世界最古の長編小説『源氏物語』の主立った舞台であり、「三条」や「北山」などの地名が変わらず留まり、そこかしこに光源氏をはじめとする登場人物の息吹が今なお残っているからである。そして、京都には独特の匂いがある。風が、雨が、雪が京都の匂いを運ぶ時、思い起こされるのは六条御息所ろくじょうのみやすどころのこと。

六条御息所は『源氏物語』の登場人物でも特異な存在である。理想の女性として描かれている紫の上や、源氏の子を産んだ正妻・葵の上、明石の方、源氏が須磨に配流の身となる原因を作った朧月夜などの女人が“あまたさぶらひ給ひける”なか、「怨霊」という形で物語に強い印象を与えた。美しく聡明で前東宮妃というやんごとなき身でありながら、年若い源氏にうち捨てられ、葵祭の車争いのあと、生き霊となって産後の葵の上をとり殺す。何ともおどろおどろしい場面を更に盛り上げるのは、「芥子の匂い」である。葵の上を襲う物の怪もののけを退散させようと焚かれた護摩の芥子の匂いが、六条御息所の髪に衣について離れない。彼女は洗っても拭えないその匂いで、自らが生き霊となり彷徨さまよったことを認めるのである。気高い貴人の胸中むしおに哀しみも一入、京都の匂いのさなかにあると六条御息所の苦しみを近くに感じる。

「匂い」は時として物語に印象を残すが、あまり物語の中核となることはない。しかしパトリック・ジュースキント作『香水』では、この「匂い」こそが主役である。『香水』の主人公グルヌイユは体臭をもたない。代わりに人ならぬ嗅覚をもち、それに固執し、「匂い」だけが意味をもつ世界に浸る。目的も欲求も何もかもが匂いのためであり、匂いの齎もたらす結果として物語は終結する。人間の抱く意味の全てが、彼の場合は匂いなのである。目を閉じて想像してみて頂きたい。花の匂い、樹の匂い、石の匂い、水の匂い、少女の匂い、そして鼻におを突く臭い。読者の記憶の断片に眠る匂いの引き出しを開けつつ、異様な物語は常軌を逸して、それでいて純粋な目をもって進んでいく。副標題は「ある人殺しの物語」。究極の香水の原料もさることながら、その効力は戦慄の一言といえよう。以前本連載で「影のない人」についてのドイツ文学作品を二点ご紹介したが、今回の「匂い」はその「影」と少し似ている。無意識レベルのアイデンティティのその意味を知る人は、皮肉にもそれをもたない唯一の人なのである。匂い以外に興味対象のない彼が「自分自身」にも関心がないことはいうまでもないのだが。

ところでグルヌイユは殺人の証拠を残しても特別な方法で刑罰からは逃れているが、普通は物証が犯人の行く末の決め手となるものである。カツラが決め手のドイツ文学史上に名高い法廷劇は、作者の存命中に日の目を見なかった。けれどもこれは別のお話、またの機会にお話ししよう。